障害児教育実践センター研究紀要　第３号，67-69，2005

＜実践研究＞

２歳吃音児の左手による描画

早坂　菊子*・宮本　昌子**

２才の吃音児に左手で描画をさせた。一般的には３才以下は強い思い込みがないため，左手で書かせる意味はないと言われているが本児のように，強い思い込みと頑固さを持っている幼児には使えると考えた。右手でかくより自由に自分の書きたいものを書いているとおもわれた。３回の試行であるため，本児の吃音を軽くするのに適切であるかどうかわからないが，３回の中では成功しているようにおもわれた。吃音は２回目で全くなくなり，３回目で少しでたが軽減した。

キーワード：２歳吃音児，左手，描画

はじめに

２歳児の子どもはまだ強い思い込みを持っていないと考えられる。左手による描画は心身を解放させ，心の中にひそんでいる子どもの部分，創造性を引き出すのに有効であると言われている（Lucia C，1988，1990，2001）。人はいろいろな思い込みを持っている。成人になればなるほどその思い込みは堅いものとなる。その思い込みを左手＝利き手でない方で自由にかくことで，小さいころからの思い込みが溶け出してゆくという（前出）。

一般的には２才の幼児には思い込みを持っていないといわれる。しかし本症例のようにこだわりが強く，やるといったら絶対やるというタイプの子どもには思い込みが芽生えているように思われる。そういう子どもに左手で描画をさせてみた。こだわりという素因がすこしでも楽になると吃音にも影響するのではないかと思われた。

対象児

氏　　名　S児
年　　令　２才４ヶ月
発　　吃　２才２ヶ月
タ イ プ　突発型　年上のいとこ３人と遊んでいるうちに一ぺんにがーといわれたので，いいいいちくんとなりだした。
波状現象　静かにしているときでも出る。
家族の対応　興奮しすぎることは避けるようにした。
家　　族　曾祖母，祖父，祖母，父，母，姉（６才）

アセスメント

HU式簡易吃音をおこなった。父親は図１のようにあまり服従的ではなかった。母親の話しによると単身赴任でずっと離れており，16年４月から一緒に住みはじめたという。

母親は図２のとおり服従的と支配的が拮抗しており，吃音には悪影響を与えると思われた。家族が多く，S児の言うことを聞いてあげないこともしばしばあったという。環境面からのストレスもS児には影響しているが，親が育てにくいというほどのがんこさが吃音にもっとも影響していると思われた。

描画の方法

当然右手でかきはじめるのを，さりげなく左手に持ち替えさせこっちでかいてねとセラピストに指示した。

結果と考察

３回の結果を考察する。表現アートは診断するのが大切なのではなく，表現することで，感情を解放し，本音の部分を増やすことになって，より深く生きられるという考えから成り立っている。左手でかくことは，

*広島大学教育学部付属障害児実践センター
**広島大学大学院教育学研究科

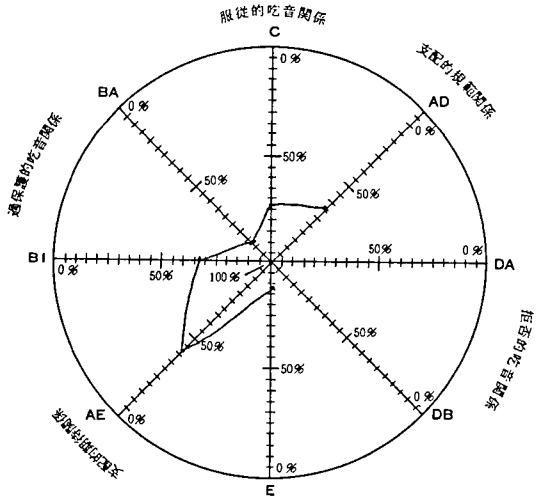

図１　親子吃音関係診断テスト（父）

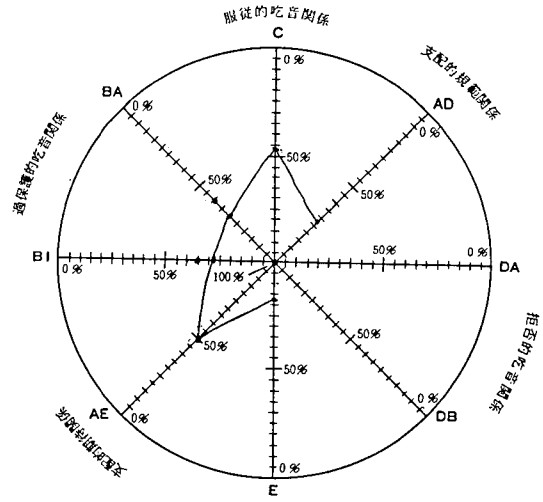

図２　親子吃音関係診断テスト（母）

右手で書くと本音が出てこないような状態の大人が，子どもの気持ちに帰るために，使うものであるから，３才未満の子どもにとっては意味がないと考えられている。しかし，思い込みが強く意固地な子どもは，環境調整のみでなく，子どもらしい素直な自分を見つける必要があるように思う。ナタリーロジャースによれば，吃音によって創造性をさまたげるものとして，１．うちなる批評家　２．失敗への恐れ　３．未知への恐怖があり，心の奥に怪物や悪魔を発見するかもしれないという。(Rogers, N).

図３はベースラインとして右手で書かせたものである。クレヨンでくるくる書くとこんなふうに成るんだとおもしろがっている感じが表されているクレヨンと手の運動がおもしろかったようだ。図４は同日に左手で書かせたものである。右手より力が入り，自分のすきなピンク色が多用されている。図５は半月後の左手の描写である。茶色の葉っぱ，お空の葉っぱといいながら自分の書きたいものを書いている。このころ吃音は沈静化していた。図６はフラストレーションを感じているのがわかる。沢山の葉っぱやいろいろなものが書きたくなっている感じである。図７は気分が次々に変わっている感じ。いろいろなことがあったのかもしれない。そうした出来事が自由に描かれていると思う。図８はいろんなイメージが浮かんでいるのがわかる。吃音は一時悪くなったがすぐ改善したという。

アメリカでは，２才２ヶ月の吃音児が悪魔の絵を書いて，これが自分の中に住んでいる，といった。どんどん絵を書かせることによって悪魔が小さくなって右側に押し込められるようになった。吃音もそれにしたがって消失していったという学会報告があった。

本児にとってはまだ吃音が悪魔とみなすほど苦しく深刻なものではないのであろう。左手でかくことによって，創造性がまし，自由度が増えてきているように思える。こういう子どもの場合両親に左手で書いてもらうのも意義あることだと思う。これは両親を非難しているのではなく，子どもが体験している感覚を体験して欲しいからである。窮屈で無視されがちな子どもの心を自分のストレスに気づくことで理解できるようになるであろう。たった３回の事例報告であったが，絵画療法の専門家にみてもらうとわかるところも出てくる。今後ともひきつづき続けるつもりである。

絵画療法の専門家相沢るつこさんに感謝申しあげる。

参考文献

CAAPACCHIONE, LUCIA 1990 The Picture of Health Newcastle Publishing Co, Inc, Van Nuys, CA

CAAPACCHIONE, LUCIA 1991 Recovery of Your Inner Child Rockfeller Center New york

CAAPACCHIONE, LUCIA 2001 The Creative Journal Bookmart Press USA

Rogers Natarie 1990 The Creative Connection 小野京子訳　表現アートセラピー　誠信書房　2002

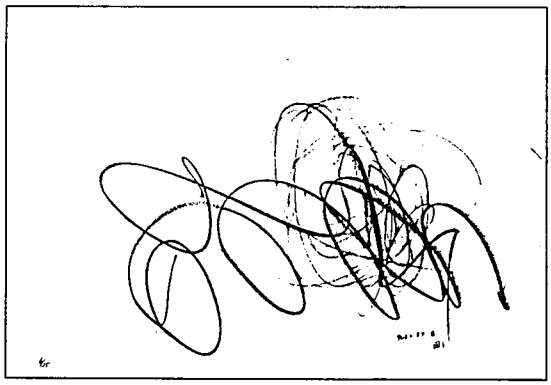

図3　右手

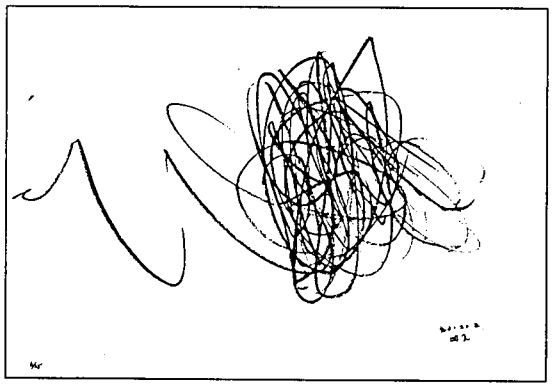

図4　左手

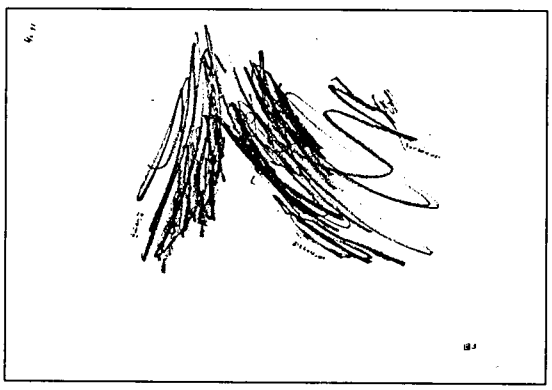

図5　左手

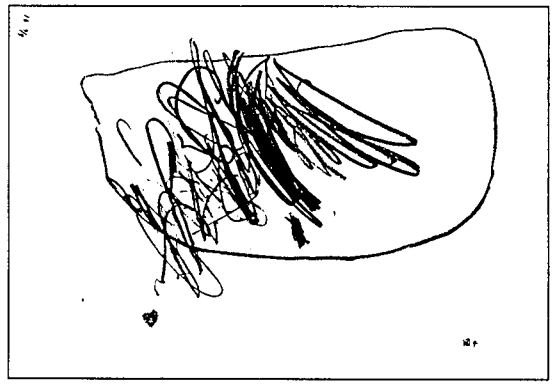

図6　左手

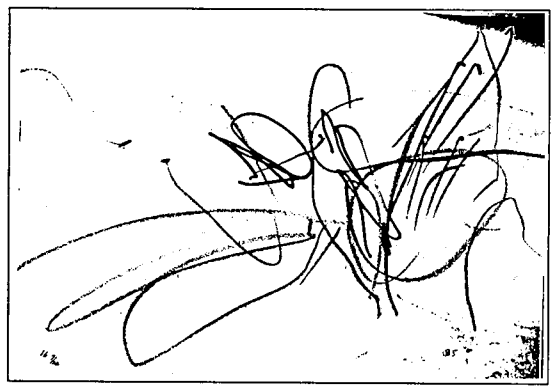

図7　左手

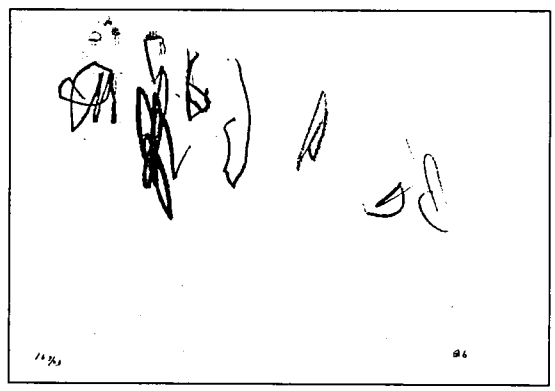

図8　左手